

事業名 福祉施設へ京野菜を寄付 食と農を基軸に社会的役割を実践

事業の概要



京野菜を現物寄付

「京野菜」という現物寄付にこだわり、地域とつなぐ
JA京都京野菜部会・同部会女性部は、管内福祉施設に京野菜を寄付している。地域社会貢献活動として2014年度からスタート。JAでは「農家が丹精込めて栽培した京野菜が地元の福祉施設に役立つことはなにより喜ばしい。地産地消の輪の中でこのような社会福祉活動が広がることを願う」と話す。京みず菜やえびいもなどの京野菜、200kg前後を毎年贈呈し、伝統的な食生活と密接に関わる伝統野菜の文化的価値を伝える。現物寄付にこだわり、社会という畑を耕す。

背景・経緯



地域住民の食の格差解消に向け、農畜産物直売所「たわわ朝霧」で発生してしまう売れ残り品を福祉施設へ提供することを検討していた。出荷者からは、売れ残った食材でなく、地域の伝統野菜「京野菜」を寄付することが社会的役割を果たすという意見が出され、取組が始まる。管内では、JAバンク京都の「赤い羽根定期貯金」残高0.03%を福祉活動団体に寄付する取組が浸透しており、組合員の社会貢献活動に対する意識が浸透している。金銭の寄付だけでなく、JAらしく、さらに未来につながる寄付をしようという想いが形となり「京野菜」現物寄付が行われている。

事業のポイント



伝統野菜の「京野菜」は生産者の誇り

京都府では、京のふるさと産品協会を設立し、生産拡大をするため「京野菜ブランド戦略」を展開している。京野菜は、京都の土壌と水、気候に合った栽培を基本に種と技術が守られてきた。生産者は切磋琢磨しながら栽培の工夫や品種改良に努め、こだわりの生産に努めている。
農家が半減する中、京野菜ブランドが確立されたことで、京都府農業産出額は近畿トップの維持率を実現している。農業をやりたいという新規就農者も年々増加し、20年前の3倍増となっている。
京野菜を使った晩餐会を2013年度から毎年海外で政府関係者、京野菜生産者当が参加のもとに開催し、世界に京野菜等府内産農畜産物を発信するとともに、地域住民に対し、食環境の格差に関係なく京野菜への愛着をはぐむ活動に取り組むことで、生産者の伝統野菜への誇りも醸成されている。

実施体制・収益構造等

	平成 26年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	令和 元年度
現物寄付量 (kg)	241.5	225.5	180.0	157.6	計画中
主な品目	京みず菜、京壬生菜、九条ねぎ、ほうれんそう、春菊、小松菜、チンゲンサイ、えびいも、「だいこん、かんしょ、やまのいも、さといも、聖護院かぶ、にんじん、花菜等				
受贈施設	3か所	5か所	5か所	5か所	

寄付する食材が毎年同じようにならないように時期をずらし寄付している。また、受贈先も同じところにならないよう、まんべんなく地域に貢献する形をとっている。広く、多くの人に京野菜を知ってもらいたいという気持ちを実践している。
※平成30年度は自然災害により収穫量が確保できず寄付を断念。

将来性・発展的展開



京野菜を紹介するJAのHP

5万人超の組合員が食と農でつながる！

JA京都は、組合員は52,388人（2019）、10市3町で管内を形成。国内で初めて、JAの正・准組合員を全て「組合員」と称する新たな組合員資格を設け、食と農を基軸とした協同組合の確立に取り組む。さまざまな立場、環境、思いを有する組合員を一つにするのが伝統野菜「京野菜」である。消費者と生産者が集う場となる農畜産物直売所「たわわ朝霧」の設立により、ローカルフードバリューチェーン構築の戦略的取組が加速する。伝統野菜をキーコンテンツに重層的に消費者と農業がつながる場を提供している。

